第48回メディアを考えるつどい
2019年6月9日（日）
あすてっぷKOBE

緊急集会！

ＮＨＫを支配するのはだれか
安倍官邸とNHK人事の怪

ＮＨＫ出身者が語る
板野氏の専務理事“返り咲き”と野望

根本　仁さん
元ＮＨＫディレクター
「ふくしま市市民連合」共同代表
「生業を返せ、地域を返せ！福島原発訴訟」原告

永田浩三さん
ジャーナリスト
元ＮＨＫプロデューサー
武蔵大学社会学部教授
「ETV2001」番組改変事件の当事者として証言

永田浩三さんは、板野氏は「クローズアップ現代」の国谷裕子キャスターを「降板」させた張本人で、専務理事への返り咲きは、安倍官邸の茶坊主集団と板野氏の猟官運動が要因ではないか、との見方を示しました。

根本仁さんは、在職時の組合（NHK労組「日放労」）活動を紹介し、特に1982年の春闘で日放労が「労使協調路線」へと方針を大転換したことが、組合の闘う姿勢を失わせ、今日のNHKの失態を招いている、と厳しく批判しました。

会場いっぱいの150人が、元NHK職員2人の白熱した講演に熱心に耳を傾けました。

板野裕爾
専務理事

NHKは政治権力から自立を！
NHKとメディアを考える会（兵庫）
ニュース No.49　2019年7月

〒650-0044
神戸市中央区東川崎町1丁目5-7
神戸情報文化ビル3F 文化村内
電話 090-5054-7171　（事務局）
http://nhkwatchers.web.fc2.com/

NHKを支配するのはだれか　（紙面の都合上、文意を変えず一部簡略化しています）

安倍官邸とＮＨＫ人事の怪

板野氏の“返り咲き”と野望

お話し　元ＮＨＫプロデューサー　永田浩三さん

神戸との長いお付き合い

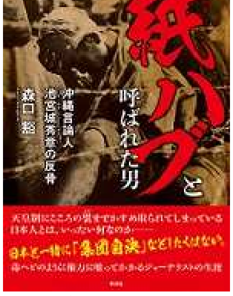
永田浩三さん

暑い中お越しいただきまして、どうもありがとうございます。この会におじゃまして、かれこれ 11 年になります。ＮＨＫを辞めたのが 2009 年の 3 月です。そのすぐあとからこちらに呼んでいただきました。私の姉は、もう亡くなりましたけれども、神戸の須磨に住んでおりました関係で、1995 年の阪神・淡路大震災のときは『クローズアップ現代』と『ＮＨＫスペシャル』のプロデューサーとして、志願をしてこちらにまいりまして、ずっと番組をたくさん作りました。東京からやってきたプロデューサーとしては、最も長く神戸に滞在しました。あのときのことをもちろん皆さんもご記憶されているでしょうが、ほんとうに大変なときだったです。西宮に最初着いたときはまだ街が焦げ臭かったです。コンビニは開いてないのに、花屋さんはしっかり営業していて、辻々に花が供えてありました。2カ月も現地にひたすら居続けると、もう涙が止まらなくて、撮影してきたものを見るだけで、もう涙が出る、そんな感じでした。そうした日々を断ち切ったのが 3 月の地下鉄サリン事件です。震災の『ＮＨＫスペシャル』で、放送の試写をしているときです。私の隣に座っている社会部のデスクのＴさんのところにメモが渡ってきました。ちっちゃい紙にサリンって書いてあったんです。事件の直後、今度は東京に連れ戻され、オウム真理教担当のプロデューサーになりました。それも大変で。家の周りを荻窪警察署の署員が警備をする、そんな日常でした。今日は 50 分ほどお話しいただきましたので、ＮＨＫの専務理事に返り咲いた板野裕爾というひとは、私の同期でございます（笑）。

沖縄と琉球新報

瀬長亀次郎さん

先日まで沖縄でロケをしておりました。これは沖縄本島の南の、南城市の新原というビーチです。森口豁さんっていう、日本テレビのドキュメンタリーをずっと作ってこられたディレクターさんです。今 81 歳です。本土復帰の前から沖縄一筋に取材を続け、番組を作ってこられました。最初は琉球新報の記者になり、その後日本テレビでドキュメンタリーを作ってこられました。NNNドキュメントというのが日曜の深夜にありますね。これはひめゆりの塔です。行かれた方もいらっしゃると思います。ひめゆりの塔のガマの奥に記念館があります。記念館の最後のところがひめゆり学徒隊で亡くなった方たちのお写真が飾ってあるんです。でも、沖縄戦はあまりに大変でしたので、写真がなかなか残ってないんです。亡くなられた方の半分は、今ご紹介した森口豁さんが、お友達やいろんな手立てを頼って集めたものです。沖縄に行かれることがあったら、ぜひひめゆりの塔や記念館に行っていただきたいと思います。今日持ってきました『紙ハブと呼ばれた男』っていう本はおとといできたばっかりです。これは、森口さんが日テレの前、琉球新報の記者をやっていたとき、琉球新報の編集局長だったひとの評伝です。琉球新報は 2 人で作ったんですね。1 人はカメジローとして有名な瀬長亀次郎さん。もう 1 人は池宮城秀意（いけみやぐしくしゅうい）さんっていう人です。あまりご存じないと思いますけれども、桐生悠々さんとか菊竹六鼓さんという戦争にあらがったジャーナリストがいますけど、3 人目挙げるとすればこの池宮城秀意さん。で、この方の一代記を書かれました。とてもいい本です。



森口豁著
「紙ハブと呼ばれた男」

琉球新報のファクトチェック

琉球新報で言えば、最近こんなことがあったんです。玉城デニーさんが沖縄県知事選挙に勝ちましたけれども、その選挙戦のときに、琉球新報は、相手陣営の佐喜真淳候補、自民党公明党の陣営がうその選挙公約を出してるのではないかと。選挙中に、本当なのかうそなのかをチェックする記事を連載しました。これは今の日本で、ものが言えない風潮の中、新聞テレビを含めて画期的なことでした。本当にすごいことです。ファクトチェックというんですけども、嘘を暴いたことで、琉球新報は大きな賞を取っています。

元号について

この４月５月は改元、新天皇誕生、トランプ来日の騒ぎで、皆さんニュース見るのはいやだと思われた方たくさんいらっしゃると思います。改元騒ぎのことで一言ちょっと申し上げておこうと思います。「令和」、つまり「令月にして風和らぐ」という（万葉集の）一連のところから取ったと言われていますけど、これはもともと大伴旅人が、中央の政府にいられなくって奈良の都から九州・太宰府に流された話なんです。この元号を考案したのは、大阪女子大の学長をされた中西進さんという人です。普通は元号制定の過程は 30 年封印といわれているんですけど、この人はしゃべりましたね。

握手したのは「日本会議」の人たち

この「令和」という元号には、原典がいくつかあります、一つは王羲之という書道の天才の「曲水の宴」というお庭に水を流して盃を船のように浮かべてその間にお酒を飲んで詩を作るという「蘭亭の序」。この「蘭亭の序」の原型が後漢の『文選』にある張衡という人の詩です。張衡はルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチみたいな人です。天文学者でもあり政治家でもあり詩人でもあるというマルチの才能を持った人です。この張衡が、中央政府が乱れきっていて官僚が妙なことをやっているから、私は「中央の政治はもう嫌になって田舎に帰って、（『歸田賦』という）田んぼを耕すよ」、ということを歌にしたんですね。これが「令和」のもともとの始まりですね。だから「令和」というのは後漢の『文選』の中に出てきて、「蘭亭の序」の中にそのものがある。大伴旅人が、長屋王の変で追放された。これは官僚がむちゃくちゃやっていて、自分たちまっとうな人間が追われてしまいましたという臥薪嘗胆のリベンジの歌なんです。これが「令和」に込められている。中西先生はそこまで全部を考えていたかどうかはわかりません。だけども、「令和」にはそういう反逆の血が流れているということをぜひご記憶いただければと思います。

日本のひどいメディア状況

先ほども言いましたけども、この４月から５月にかけてひどかったですね。このトランプ大統領と安倍さんの２ショットは自分で撮った写真ですよ。(笑)。すごいでしょ、この満面の笑み。（会場　笑）

トランプ大統領と安倍首相
ゴルフ場で満面の笑み

ＮＨＫはその先棒を担ぎましたよね。大相撲の中継ですけれども、升席（マス席）を 1000 ぐらい押さえたといわれています。トランプに握手を求めた姿が大相撲の中継のときに出てきたんです。よーく見てみると、白髪の方は金美齢さん、門田隆将さん、それから緑の服、ちょっと見えにくいですけど、櫻井よしこさんですね。ＮＨＫのアナウンサーは「一般の方も握手を求めています」と言いましたけど、一般の方じゃない。これは「日本会議の方々が」とちゃんと言うべきです。握手を求める前の映像を見ましたけど、安倍さんが「こっちこっち」と手招きするのも映っていました。私物化がこんな場面でもあるということでしょう。

辺野古の海　サンゴ移植のウソ報道

沖縄に行っていて、沖縄の新聞は大きく報じたものがあります。米軍基地や自衛隊の基地をドローンで撮影することが禁止になりました。(改正ドローン規制法６月 13 日施行)これによって辺野古の上を飛ぶことができなくなったんです。辺野古の新

日曜討論

基地建設のひどい状況を、上から見られなくなるでしょう。問題は、今年の１月の最初の『日曜討論』です。安倍さんが忙しくて生放送に出られなかったんですね。このパートだけ収録でした。安倍さんは「あそこのサンゴについてはこれ移しています」と言ったのです。サンゴを移しているなんて誰も聞いたことないですよ。案の定、琉球新報はそんな事実はないと、批判の記事を載せました。東京新聞も、市民の判断を誤らせるようなことをしちゃだめと。ＮＨＫが放送でそれをやっちゃだめということで私もコメントを載せました。変なことを総理大臣が言ってそのまま垂れ流すのは言語道断です。安倍さんは、３月はこんなことを言いました。「データについての公正で国際的なルール作りを進めていかなきゃいけません」と。データの改ざんをやっている人が（笑）、盗人猛々しいとはこういうことを言うんじゃないでしょうか。安倍さんはこんなことをほぼ毎日のように言っているということでしょう。「日本の政治を破壊した人」といわれていますが、「日本の言葉を破壊した人」でもあると思います。

森友問題の報道は

森友学園問題はまだ終結していません。ＮＨＫの大阪放送局でスクープをしていた記者、相澤冬樹さん、ちょうど震災のとき、神戸放送局にいて、私と一緒に番組を作りましたよ。最近はＮＨＫを辞めて、大阪日日新聞の記者をしながらいろいろ話もされていますけれども、彼も参加した東京での５月 24 日の集会に籠池ご夫妻が来られて言ったことに、もう椅子から転げ落ちそうになったんです。

近畿財務局が土地を８億円も安く値引きして売った話ですけれども、そもそもその根拠になったごみ。写真を撮った場所が１カ所なのに複数のように偽装したということは皆さんご存じだと思います。でも、５月 24 日の集会で、籠池さんは「そもそもゴミはなかったんです」と言ったんですよ、（笑）。「いったい何なのだ。全部ウソじゃないか」という話ですね。「これをウヤムヤにしてなるものか」ということですけれども、残念ながら衆議院の予算委員会は 100 日開かれない。「議員の３分の１が要求したら開かなきゃいけない」と（衆院規則第 67 条第２項に）書いてあるんです。これは「追求されるのが嫌だ」ということですね。文書改ざんに手を染めた近畿財務局の方が自殺をされた。このことの決着はついていません。

瑞穂の國記念小學院と籠池氏
「森友学園問題は終わっていない」

加計問題の報道 インタビュー潰したＮＨＫ

もう一つの加計学園問題。この写真の真ん中は、加計孝太郎さんで、右手が萩生田光一さん（東京八王子の選挙区）ですけど、この人が大体、汚れ仕事をするんです。「（衆参）ダブル選があるかもしれない」とか、「消費税上げないほうがいいか」とかいろいろ、アドバルーンを上げて「どっちがいいかな」みたいなことを言って様子を見るということでしょうか。この写真は萩生田さんが自分で挙げている写真です。悪だくみをしている写真を自分で挙げて、「自分は安倍さんと、加計孝太郎氏とこんなに近いよ」ということを発信しているという、非常におかしな世の中ですよね。この悪事について敢然と一人で立ち向かっているのが前川喜平さん。ＮＨＫとの絡みで言えばこうです。前川喜平さんの、長いインタビューを最初に取ったのはＮＨＫですよ。30 代前後の社会部の記者が頑張って世田谷区の前川さんの家の前で、前川さん帰ってくるところを狙って、「前川さんお話ししていただけませんか」と交渉して、「わかりました」と言って。前川さんのインタビューだけじゃあだめなので、本当なのかを現役の文科省の官僚複数に当たって、きちっと裏取りをして、ニュース原稿も用意をして「出すぞ」という時に、「待った」がかかったんです。これは取材した社会部はとても悔しかったと思いますね。それを止めたのが政治部です。

安倍首相、加計孝太郎、萩生田光一

政治部　岩田明子記者の虚報

岩田明子記者

政治部ではこの人（岩田明子記者）です。「安倍さんは東アジアの外交をリードしている」と伝えている。そんなはずないと僕は思います(笑)。「正恩委員長と条件なしで会いたい」と言ったが、北朝鮮のメディアからは「図々しい」と言われたんですね。

朝鮮語で言えば確か、「クマの手のようだ」って言ったんですね。クマの手のひらみたい、何かそれが一つの比喩になっていて、「図々しい」と翻訳しているんですね。なかなか的確な言葉です。今度イランに行くらしいですけど「彼はトランプさんの期待を一身に背負って米･イランの架け橋になります」とでたらめなことを伝えているのが岩田明子さんです。ＮＨＫのニュースで間違いを出すことはあり得るんですよ。しっかり取材したけども結果的に間違っていたというのは。本当はそんなこと少ないほうがいいですけど、でも、彼女はそうじゃないんです。安倍さんに誰よりも食い込んでいるから本当のことは知っているんですよ。安倍さんに都合のよいように伝えるのは、誤報とは言わないですね、虚報ですね。

板野氏の専務理事返り咲き
官邸の茶坊主集団と板野氏の猟官運動

こういうＮＨＫの惨状の中で板野裕爾さん（６５歳）が専務理事に返り咲くことになった。この間まで、ＮＨＫエンタープライズというＮＨＫの関連会社で最大の会社の社長だったんです。その前はＮＨＫ専務理事放送総局長だったんです。放送総局長というのはＮＨＫのニュースと番組の

安倍官邸の人たち

総責任者で偉いんです。新聞で言えば編集局長という感じでしょうか。板野くん1953年生まれ。1977年の入社です、私よりも１歳年上ですけれども、今のＮＨＫの幹部を見てみると、木田放送総局長専務理事も同期。児野（ちごの）という技術長も同期です。みんな1977年入局です。

「クローズアップ現代」つぶし

彼は政治部ではない、経済部記者でここがミソなんです。彼は経済部長をやったあと、福島の局長になりました。籾井勝人前会長時代に放送総局長をやりました。23年続いた『クローズアップ現代』を私は8年やりましたけれども、国谷裕子キャスターを悪く言う人はいなかった。そんな中で、「国谷さんもうお引き取りください」と決めたのが板野くんですね。現場は全員が反対したんです。全員が反対するってすごいですよ。国谷さんはＮＨＫ職員じゃありません。ＮＨＫじゃない人間が凛々しく毅然とキャスターを務めるのがどれだけＮＨＫにとって大事なことだったか。ＮＨＫの宝みたいな人だった。それを、板野くんは中止を決めたんです。

石原進（JR九州相談役）というＮＨＫ経営委員長とも東京都立戸山高校で同窓です。こういう、誰々と誰々は先輩･後輩だ、みたいなことが世の中の仕組みを作っている、その典型だと思います。安倍さんの取り巻きは、ひどい人たちがいっぱいいる。　（会場　笑）

うごめく官邸の人脈　板野氏と杉田氏

麻生さんは言うに及ばず。菅官房長官の下に官房副長官の杉田和博さん。今回の板野復活は杉田さんが絡んでいます。谷内（やち）正太郎さんは外務省の事務次官もやった人ですね。それから北村滋さん、杉田和博さんは２人とも警察官僚です。

前川喜平さんの行動を読売新聞に書かせて「出会い系バーに行っている」とか言っておとしめようとしたのは、この杉田、北村巌ラインだと思います。長谷川榮一広報官、この人は経産省です。和泉洋人さん、国土交通省です。今井尚哉さん、経済産業省です。こういう人たちがうごめいているわけです。

杉田氏もあきれる板野のウソ

杉田官房副長官は、内閣人事局長も務めている、だから

（板野氏復帰に）この人が動いたんです。最近で言えば皇位継承式典事務局も司っていました。杉田さんが今の地位になる前、ＪＲにいたことがあります。そのときに彼も組合対策をやりました。それで、板野くんは今回こんなことを言っていたんです。ＮＨＫの組合があたかも今も強いように話して、「杉田さんがＪＲを押さえたように私もＮＨＫの組合を押さえますから」みたいなことで売り込んだ。でも、そんなことは実体としてももうない。それで、杉田さんのほうは「板野がこんなふうに売り込んできているけど、調べてみたらＮＨＫの組合が悪さしているなんてでたらめだし、いったい板野くんは何なんだ」とむしろ聞いてきたりして、「板野はおかしい」というのはみんな知っているんですよ。

永田浩三さん

ＮＨＫはすでに政権に私物化されている

「板野が送り込まれてＮＨＫが安倍政権によって私物化される」という話がありますが、もう私物化されているわけだから、板野が入ってこようが入ってこまいが関係ありません。今回の出来事は、板野が自分で戻りたいと猟官活動をした結果です。安倍政権は板野を送り込みたかったわけでも全然ないと思っています。

彼が実力を持っていて、現場から尊敬を集めていると聞いたことがないです。お父さん（板野学）は、元ＫＤＤ社長でした。最初、記者になったときはお坊ちゃまだったので辛くて辛くて、いっとき職場に出てこられなくなったこともあると聞いています。弱い人ですよ。長く記者をやっていたら、普通１個や２個スクープがあって当然なんですけど、板野くんのスクープを聞いたことが私はありません。ニュースで言えば、出稿部というんです。実際のニュースは取材してきた人たちのものを集めて、最後テレビやラジオで放送に出していくということで、出稿部が一番威張っているわけですけども。

これまでのＮＨＫ、これからのＮＨＫ

戦前戦中は同盟通信の原稿をもらっていたんです。それをラジオの原稿にしてアナウンサーが読む。自前の記者はほとんどいなかった。戦争の旗振りをしたＮＨＫですが、戦後に悔い改めて、やり直しますっていうことで取材の体制を作っていって放送記者というのが育っていきます。

大学を卒業して記者になりたい人が目指すのは朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、そのあとＮＨＫだった時代が長いです。あるときからＮＨＫの記者はそれなりのステータスになりましたけれども、ＮＨＫの記者は三流とは言いませんけれども、長く二流だったと思います。一方われわれの、番組制作はどうなのか。一流って自分で言うのも恥ずかしいですけど（笑）、世界にまねのできないようなものをいろいろ作ってきた。勝負の世界は日本だけではないということでやってもきて、ドキュメンタリーとか、そこそこ世の中に評価されるところまでやってきている。ニュースと番組制作部門は別会社っていうことでしょうかね。

ネットでの常時同時配信　法改正実現のために安倍政権に代償

今、ＮＨＫは「公共放送」とはだんだん言わなくなっていて、「公共メディア」と言うようになっています。これ何なのかというと、法改正が行われて、インターネットで常時どこでも同時配信をするということです。ＮＨＫの放送を、テレビ受像機で見なくてもいいという世の中になります。ＮＨＫは政治家を敵に回すとネット配信ができなくなるので、この法改正までは、政治家を怒らせないためにこの代償として安倍さんに極めて甘いニュースを出し続けてきたベースがこれだと思います。今回、地上波の総合テレビ、Ｅテレとかが全部ネットでも見られるということになっていくわけですね。それまでは災害放送とか大型のスポーツとか一部だけの配信だったんですけど、そうではない。テレビを持ってなくてもＮＨＫの番組は見られるということで、利便性は確かに上がるんです。だけども、じゃあ中身は、特にニュースは視聴者に支持されるようなニュースなのか、支持されるサービスなのかというと、それは疑問ですよね。

ＮＨＫの肥大化と堕落

今、「ＮＨＫとメディアを考える会（兵庫）」が、４月にウオッチした資料を読ませて頂いていますが、本当にひどいですよね、ニュースのラインナップが。民放はＮＨＫのこうした新しい展開について、肥大化を批判しています。

昨年度の決算の速報値を見ると、受信料収入7332億円です。とんでもない額ですよ。収納率が82%、これだけスキャンダルがあって「安倍チャンネル」と批判されているにもかかわらず、受信料不払いは燃えさかっていないということですね。事業規模は、日テレが3100億円、フジテレビが2600億円、テレ朝2300億円、TBS2100億円、テレビ東京が1100億円。つまりそれよりも2倍も3倍も、ＮＨＫが大きい。ＮＨＫがここまで肥大しているということはぜひ覚えておいていただきたいと思います。

テレビ離れの若者を取り込みたい

一方、テレビ離れは本当に進んでいるんですね。本当はグラフで見ていただくほうがわかりやすいんですけど、例えば10代は、2013年、6年前、テレビを一日103分は見ていて、ネットは99分、つまり若干もテレビのほうが多かったんです。ところが2017年、テレビ73分、ネット129分です。見事にこの4年間にテレビが30分減り、ネットが30分増えたということです。この人たちにＮＨＫはそのまま取り込んで、「ネットでテレビ見てくださいね」ということです。「同時再送信」というのは、リアルタイムで確かに見られます。でも、若者たちの視聴方法はリアルタイムじゃないんです。見たいときにいつでも取り出して見るということですから、いくらＮＨＫが若者を取り込みたくてネットで見られると言っても、それがキープされていつでも取り出せるようになってない限りは、若者を取り込むことはまだまだできない。あるいはずっとできないかもしれません。

板野氏復活の影響は

そんな中での、板野くんの復活ですね。何の役をやるのか、関連会社の取りまとめです。これは一見、大した仕事じゃないように見えますが、関連会社の取りまとめをしていることは、年取ってきてＮＨＫから関連会社に天下る偉い人たちが、どういうふうに人生展開するかを握っているということですから、板野さんに盾が突けないということでしょう。上田会長は、板野さんが戻ってくることに反対だったと聞いています。でも、そうならざるを得なかったということですね。関連会社のお金を握り、人事を握る、政治家のパイプを握る、これがどういうことかというと、例えば、ＮＨＫ交響楽団のチケットを政治家が上手に使うとか、汚い話がいろいろあるんです。ＮＨＫの受信料以外の事業展開のところで、政治家とのつながりがあるということでしょう。

板野くんは政治部ではないとさっき申しました。政治部の親分連中は今の専務理事荒木、それから正籬っていう二枚看板です。その下にＫアラートと呼ばれていて、これはＪアラートっていう北朝鮮のミサイルに「机の下に隠れましょう」みたいな。小池報道局長のＫアラート、これは安倍さんに都合の悪いものは出しちゃいけないよっていうのが直に指示がくるのでＫアラートといわれています。ナンバーツーの副会長が堂元、この人も政治部です。

島桂次会長、海老沢勝二会長がいました。どちらも政治部なんです。その前はＮＨＫの会長は政治部は一人もいなかったんですよ。そもそも戦後最初の会長は高野岩三郎さんという東大の経済学部の教授もやっていて、共和国憲法を提唱した人です。天皇制廃止を言った人ですね。これがＮＨＫ戦後初代会長ですよ。この高野岩三郎さんの次ぐらいから、だんだんおかしくなっていくんです。一番力を持っていたのが前田義徳さんっていう朝日からきた人です。ＮＨＫは政治家からいろいろ言われるっていうのは、ずっと有史以来そうだったと思います。ＮＨＫがいつも政治家に言われ放題ってのは嫌だなって、誰しもＮＨＫの人間は思うわけです。そこにＮＨＫナショナリズムというのが生まれるわけです。政治家から言われるＮＨＫじゃいやだと。自分たちが政治家に対して強く出られる人間をっていうふうになっていくんです。島桂次という人は保守本流、吉田茂の流れをくむ宏池会っていうのがあって、そこと深い繋がりがありましたね。宮澤喜一とかいろんな人たちを生んでいる宏池会ですけれども、大平正芳とかそういう人たちとも仲のよかった島桂次氏がＮＨＫ会長になって、政治家からがたがた言われるＮＨＫから脱却するみたいなことをやろうとするんです。しかし、うまくいかなかったですね。

結果的には失脚した、失脚をさせたのは海老沢勝二という人だともいわれていますね。伏魔殿のＮＨＫといわれるゆえんはこういうところにもあるでしょう。政治家からがたがた言われるのは嫌なんです。そのあと海老沢さんがＮＨＫの会長になり、ＥＴＶ2001番組改変事件が起きます。海老沢さんの後釜に座ろうとしたのが諸星衛という政治部記者出身の理事です。2005年、番組改変が朝日新聞のスクープで世の中に知られるようになった時、諸星氏がニュースに下りてきて、番組改変事件なんかなかったよっていうことでニュースに指示して、おかしなニュースを出させるんですね。われわれは騒ぎましたから諸星氏と敵対をして、諸星さんは会長になれませんでした。その後、ＮＨＫの生え抜き会長というのがなくなるんです。橋本元一という技術畑の人が会長になり、そのあと、朝日ビールからきたりとかＪＲからきたりとかいうことが続きました。

そのあと、三井物産から籾井勝人というとんでもない人がやってきて、今、上田会長ですけれども、生え抜きの会長を作りたいということがうごめいているということです。このうごめいている中で板野専務理事の復活ということでしょうか。このどろどろの中で板野くんが、漁夫の利を得ているという言い方もあるかもしれません。彼はそんな主体的な人間ではないと私は思っています。

働き方改革のゆくえ

働き方改革についてですが、5年前、社会部記者の佐戸未和さんが過労死しました。選挙報道で疲れ果てて亡くなりました。来週、組織改正があります。私がいた文化福祉番組は股割きになって、ＥＴＶ特集のチームと福祉チームがそれぞれ分かれていきます。実は、私はこのことについて今なかなか判断しにくいなと思っております。ＥＴＶ特集は『クローズアップ現代』などと一緒になります。福祉のチームは『ためしてガッテン』のチームや『あさイチ』とかと一緒になります。悪いことばっかりではないなと思っていますが、専門の集団としてのドキュメンタリーチーム、専門の集団としての福祉チームが今後もちゃんといい人材を育てていく、そういうことであってほしいと私は強く願っております。（会場　拍手）

ＮＨＫを支配するのはだれか？（文意を変えず一部簡略化しています）

お話し　元ＮＨＫディレクター　根本　仁さん

神戸は身近な土地

福島から東北新幹線朝一番列車に乗っても、神戸に到着したらもうほとんどヘロヘロになってるだろう、ということで、昨日から神戸に入らせていただきました。

明るいうちから神戸港を見て、「兵庫の会」の事務所を拝見。その後、海辺に下りて潮風にあたり、潜水艦などハーバーランドの街らしいところの説明を受けました。夜はちょっと歌などを歌わしていただきました。（会場 笑）

僕は昭和46年、1971年にＮＨＫに入局。最初は九州に配属されましたが、昭和53年から58年までの5年間、ＮＨＫ大阪（ＢＫ）でドラマ制作に関わりました。昭和56年に神戸のポートアイランドがオープンした直後には、ドラマ人間模様「海辺のマリア」のロケーションをしました。

「ドラマ人間模様」が終わって、新たに「シリーズ　ドラマ10」というドラマが始まりました。その最初の作品が、平成元年に放送された岩下志麻さん主演の「花の降る午後」でした。ここでも神戸の街をあちこちロケをさせていただきました。

その後、1995年の阪神・淡路大震災。このときは東京のラジオセンターにおりましたので、ラジオのＮＨＫ第一放送で、発生から10日ぐらいあと1週間ほど神戸の街を取材し、全国に現地の様子を放送しました。倒れた高速道路、いつ倒れるかもしれない大きなデパート、そういったところを自転車で走り回りました。そんなことで、神戸の街は私には身近な土地でございます。

（一）ＮＨＫに職を求めたのはなぜ？

今日のテーマ、「ＮＨＫを支配するのはだれか！」については、私は自分自身の体験、ＮＨＫ内部で、どのような戦い、抵抗をしてきたかについて、私なりの歴史を振り返りながらお伝えしたいと思います。

根本　仁さん

まず今回のタイトルであります。「ＮＨＫを支配するのは誰か！」に対して、私は「ＮＨＫを支えるのは誰か」と言い換えて問いかけたいと思います。板野専務理事の野望！に対しては「野望を打ち砕き対峙するスタンスとは何か」と、置き換えてみました。まず「ＮＨＫ職員は、なぜＮＨＫというところに職を求めたのか？その動機は何だったのか？その動機は今も生きているのか？」その辺をまず確かめてみようと考えます。

影響を受けたドキュメンタリー

私は、昭和41年に福島の田舎から大学のために、東京に出てきました。当時は、ベトナム反戦で、僕とあまり年の変わらない若い人がタオルで顔隠してヘルメットを被り、ワッセー、ワッセーやっているんですね。僕なんて田舎か

ら出てきましたから、「革命」なんて言葉を聞いただけで、もうびっくりしました。僕は３年生から麻雀にのめり込んでいきました。（会場　笑）

麻雀をやっていましたから卒業は４年ではできないことになった。就職も１年遅れになり、将来を考える時間が、１年できたことになります。３年生のときに福島の自宅にあった白黒テレビ第１号を東京の下宿に持ち込み、テレビドラマとかドキュメンタリーを、幅広く見始めるようになりました。その中で、「あれっ」と思ったドキュメンタリーが１本ありました。「24 時間都市」という番組です。1970 年・昭和 45 年の２月 13 日の放送。この番組の紹介文には「高度成長期を背景に当時のソニー副社長の盛田昭夫氏は 24 時間都市宣言を行い、産業や生活形態による時間の活用を提唱していた。深夜トラックとか工場の 24 時間交代制が日常的になっていく」。このような番組を作る人たちへの興味を覚えました。この「24 時間都市」という番組は、僕の中では強烈な印象があり、今も私の心に生き続けています。

（二）ＮＨＫ入局
長崎原爆と福島原発の縁

昭和 46 年、1971 年にＮＨＫに何とか就職することが出来ました。最初の赴任地は長崎県北部のＮＨＫ佐世保放送局でした。佐世保市は旧海軍の街であり、戦後はアメリカ海軍の基地がある街です。４年間、佐世保で番組を作りました。ＮＨＫ長崎放送局で３年間、計７年間を長崎で過ごしました。佐世保市と長崎市は「核」に大きく関わる街でした。佐世保港にはベトナム戦争で頻繁に出入港する原子力潜水艦の数々。長崎では原爆の番組を制作しました。長崎に落とされた原爆はプルトニウム型の原爆。一方、広島に投下されたのはウラン型原爆。アメリカは二種類の原爆を使って、それぞれの効果を試しました。世界を軍事的に支配するため日本に別々の種類の原爆を落としたのです。

今から８年余り前におきた東京電力福島第一原発の爆発事故。その３号機はプルサーマル運転の原子炉です。ウランにプルトニウムを混ぜ込んだＭＯＸ燃料を使って運転している原子炉です。ウラン原子炉より溶融温度が低く、普通のウラン型原子炉よりも危険性が高いのです。ですから福島の３号機はすさまじい爆発を起こしました。そうしたことを思い起こすと、佐世保、長崎、福島が一連のようにつながっているような不思議な縁を感じます。

根本　仁さん

ディレクターの仕事に目覚めた

最初の佐世保局でディレクターとして大きな影響を受けたラジオ番組と出会いました。昭和 46 年度文化庁芸術祭「ラジオドキュメンタリー部門」大賞受賞作の「25 年目の教室～夜間中学の１年」。ディレクターはＮＨＫ大阪（ＢＫ）の福田雅子氏でした。様々な事情で義務教育を受けられず、文字が読めない人たちのために開かれた夜間中学校の１年間を追った番組でした。そうした人たちの試みが、戦後 25 年目にして大阪市立天王寺中学校夜間学級で始まったのでした。福田ディレクターの粘り強い取材、戦争への怒り、社会的弱者への温かな視線、こうしたものが番組からあふれ出ていました。

「ああ！ディレクターの仕事とはこういうことか！」この番組を何度も聴き直して叩きき込まれた感想でした。

（三）ＮＨＫ労組「日放労」との関わり

ＮＨＫの放送を権力から守るための内部組織として最も強力に存在したのはＮＨＫ唯一の労組「日放労」でした。私がＮＨＫに入局したころは職員１万３千人、日放労組合員は１万人、といわれました。かつて法学部の学生であった私は「労働法」の重要性は理解していたつもりです。ですから、「労働法」の授業には真面目に出席しました。そして社会人となり、学問が実践に変わりました。「労働法」は「労働者の生命・健康・暮らし・基本的人権を守る法律」ですが、ＮＨＫというマスメディアにはさらに「権力の介入を防ぐ防波堤」の役割も担っていました。最初の赴任地・佐世保放送局では、2 年目には合理化の対象になりました。県庁所在地以外の放送局の番組部門（ディレクター・アナウンサー・技術スタッフなど）を削減するというのです。全国で 12 局が対象とされました。私は執行委員として抵抗を試みましたが、結局、昭和 50 年に集約され、親局であるＮＨＫ長崎放送局に異動になりました。長崎局でも執行委員をし、放送対策部長（放対部長）を務めました。

ＮＨＫ会長を辞任に追い込む

長崎２年目の昭和 51 年には「ＮＨＫ会長辞任」という

事件が起きました。小野吉郎・NHK会長がかつて郵政事務次官であったころ、郵政大臣だったのが田中角栄・元首相でした。田中角栄氏はロッキード事件で逮捕され、保釈されました。そこに小野吉郎氏は、NHK会長という立場で田中邸を訪れたのでした。そのことが新聞記事に大きく掲載され大問題になりました。日放労も、「NHKの会長ともあろう者が逮捕後の元首相に会いに行くとは、権力との癒着が国民に疑われて当然」と判断し、全国の組合員が葉書を持ち、市民の中に入って「小野会長は辞任せよ！というハガキを出して欲しい」とアパートなどを回る「ハガキ運動」に取り組みました。新聞・雑誌もこの問題を大きく取り上げ、結局、問題発覚から1ヶ月足らずで小野吉郎氏はNHK会長を辞任しました。これはNHK労組「日放労」の歴史に残る快挙といえます。

しかし、日放労の闘いの歴史はその後、大きく変わっていきました。念願のドラマ制作に初めて関わったのは昭和53年に異動したNHK大阪（BK）芸能部ドラマ班でした。ここでも執行委員を務めましたが、初めて組合の分会長となった昭和56年から57年にかけての1年間でした。このとき、日放労に大事件が起きました。世の中は国鉄の民営化をめぐって、労働側と政財界が激突の様相を呈していました。私の分会は「日放労関西支部放送第三分会」といい、ドキュメンタリーや農事番組、学校放送、幼児番組、福祉番組を制作する「教育部」とドラマ、お笑い、古典芸能などの番組を制作する「芸能部」の組合員112名からなっていました。

根本　仁さん

８２年春闘で起きた「事件」

「事件」は、1982年春闘の最中の4月1日に起きました。組合から協会に向けて申し入れた「4.1組合申し入れ」です。現在の「日放労」の将来を予知する事件でした。労働運動を経験した方ならご存じだと思いますが、春闘の前に各職場で組合総討議を行ないます。春闘の半年前ごろには全国の分会長を集めて臨時中央大会が開催されます。僕も関西支部放送第三分会の代表として参加しました。

討議資料を見ますと、いつもは書かれている「ストライキ」という文字が書いてなく「強い戦い」と表現が変わっていました。これについて質問しますと、委員長は「ストライキと読み替えてくださって結構です」と答えたのです。「重要な言葉をなぜ削除し、別な言葉で読み替えるのか？読み替えるんだったらちゃんと元通りに書いたらええやないか」と、思いました。僕はこの時、「これはおかしい。何かある」と感じ取りました。

そして春闘を迎えました。問題の4月1日。4.1エイプリルフールの日です。普通はそういう日には大事なことはやらないですよね。ところが日放労中央闘争委員会は、「4.1組合申し入れ」をやってのけました。これまで聞いたこともない突然の話でした。今日持って来た5枚の報告書は、私の手書きのリポートです。‘８２春闘が全部終わってから組合員、関西支部、組合中央に配布した「放三ニュース」です。タイトルは、「中闘のマル秘作戦～三六の中央協定～」、三六というのは、三六（さぶろく）協定と呼ばれる労働基準法第36条のことです。労使双方がここの部分に手をつけたのです。

申し入れの文言は「今日的状況に即した新たな勤務条件協定締結への協議」。4月13日の団交確認では「新たに勤務に関する中央協定を締結し、各事業所ごとの三六協定並びに付属確認は、原則としてこの内容によって締結するものとする」となっていました。

ということは、各分会でこれまで取り決めてきた確認事項や、多くの先輩たちが獲得してきた「闘いの成果、これらをみんな破棄してぶん投げろ！」ということです。要は組合中央が一括して協会と交渉するということです。

この組合からの「申し入れ」は、協会側にとっては大歓迎の提案でした。だから定年延長、週休二日制の検討、など宝の山のように協会は出してきました。しかし、これを実施したらどうなるか？もともと「三六協定」というのは、制作条件や労働条件がそれぞれの事業所で大きく異なるから、各事業所ごとに締結することが決められているのです。

さらに別の問題も

さらに別の問題もおきました。半年に一度開く「三六協定団交」は、労働条件だけではなく、それぞれの事業所で起きている問題や放送内容に関しても労働組合からの問題提起、それに対する協会側からの説明・釈明が行なわれて

根本　仁さん

いました。つまり、労使の間に緊張関係が存在していたのです。それが権力側からの攻撃を防ぐ防波堤の役割を果たしていたことも重要な点でした。

８２春闘で私たちの「放三分会」は反対表明をしました。1カ月後には東京の国際第二分会が反対表明しました。当時、全国には174の分会があり、反対に立ち上がったのはこの二つの分会だけでした。ただ、この組合中央の春闘妥結提案に対し、「ノー」を突きつけることの意味は重いものでした。組合と協会側の共同提案ですから、組合に「ノー」といえば「協会」にも「ノー」ということになります。将来の勤務地、昇進、などが頭をよぎります。しかし、８２春闘はとんでもないのが出てきちゃった。これを黙認すれば、将来大変なことなることは組合員の大多数は理解していたはずです。将来のＮＨＫ人生は「どさ回り」になるかもしれない、サラリーマンが抱える問題です。

執行委員にも真剣に問いかけました。「今回の問題は簡単な問題じゃないことはみんな知っているはず。だから本気になって結論を出してくれ」、と訴えました。誰も「これはしょうがない」とか、「俺は反対するのは嫌だ」と発言する執行委員はいませんでした。そこで職場集会に臨むことになりました。職場集会に参加したのは71名。組合中央の妥結提案に「反対する」ことはそれほど簡単ではありませんので、なかなか反対の道筋が見えてきません。議論も半ばを過ぎたころ、お笑い番組を担当していた先輩ディレクターが発言しました。「いや、これはこれまで職場総討議で一度も聞いたことがない。突然発表された話ではないか？これは手続きに大きな問題があるんじゃないか」と。労働組合の理念として、少数意見の尊重、手続きの公正さなど、組合民主主義の基本です。この意見であれば、「反対表明」までいけるのではないか？と一瞬思いました。そこで急遽、拍手での採決ではなく、これだけ重大な問題に反対することですから、挙手による採決にすることにしました。採決の結果は71人中69人が「中闘の妥結提案に反対表明することに賛成」しました。手を挙げなかったのは2人だけでした。８２春闘が終わり、総括号を5枚にわたって書き上げました。８２春闘総括号！！の文末に書いた一文です。

「８２春闘総括レポート」・日放労の転落

『今次、８２春闘において中闘の素顔が鮮明に浮き彫りにされた。協議事項三項目の第3項を＜勝ち得た確認＞とし、＜明日からの戦いの足場となる＞と表明しているが、その＜足場＞とは、大多数の組合員の同意を得ることなく中闘の独断で築いた＜足場＞である。中闘は組合民主主義を謳う「日放労の輝く歴史」に一大汚点を残した。民主主義の原則は、「民意の反映、異なる意見の尊重、そして手続きの尊重」である。中闘表明文末に言う＜新しい戦いへの歩み＞とは、中闘の思うままになる組合組織を作り上げ、80年代に船出することを意味するのであろう』

これ以降、日放労は闘う組合から労使協調路線へと突き進んでいきました。

そして現在の日放労は？

今の日放労には「闘う組合」という言葉さえありません。今の日放労を視聴者が見えるとすれば、日放労のホームページがあるだけです。そこに委員長見解という文章があり、年に2，3回更新されるだけです。

日放労の前委員長・山越淳氏と2009年に面談した「ＮＨＫを監視・激励する視聴者コミュニティ」共同代表の醍醐 聰さんから送られてきた証言記録があります。

その文面には「三六協定や団体交渉」といった言葉は一切出てきません。出てくるのは、「労使協議とか労使討議」などといった労使一体を表す言葉です。労使一体が悪いとは言いませんが、場合によっては対決することも必要ではないでしょうか。永田さんがかかわっていた「2001年の慰安婦番組の改変問題」について、（日放労が支援しなかったこと）山越氏は「長井暁デスクは管理職だったので組合員ではなかった。だから日放労はかかわらなかった」と語っています。あの問題は番組制作者が組合員であるか組合員でないかの話ではないはずです。

2009年に面談したときの委員長・山越氏は次のようにも語っています。「私はＮＨＫに20年になりますが、元々ドラマを担当していたのでジャーナリストとは思っていませんでした」。

「ドラマを作る人間はジャーナリストじゃない？何をアホなことをいうとるんや」と思いました。労働組合のトッ

プの人間の「ジャーナリスト」に対する認識がこんなにもひどいものかと思いました。今年の3月22日の放送記念日。板野氏はまだ就任前でしたので、渋谷のＮＨＫの西口で「板野就任を辞めさせろ」という集会が行われました。私もリレートークに参加しました。そのあと、日放労の現在の委員長・中村正敏氏と初めて面談しました。でも、彼の口からは、団体交渉、三六交渉、などの言葉は一切出ませんでした。残念なことですが、今の日放労には権力からの圧力から公共放送ＮＨＫを守り、跳ね返す力は感じられませんでした。

最後に二つ、ジャーナリスト・ジャーナリズムについてお話したいと思います。

昭和５１年ころの筑摩書房出版の月刊誌「展望」の「ジャーナリスト像」という一文です。イギリスの「ロンドンタイムス」編集長ウィッカム・スティードが1938年に書いた言葉です。

ジャーナリストの資格とは

『ジャーナリストの第一の資格は、社会の幸福（PUBLIC WEAL）に対する真実の関心なのである。その関心を、新聞や雑誌の本来の社会的任務を果たすことによって生かしてゆくのが本当のジャーナリストで、彼らは“自分自身の判断の標準をもち啓蒙的な知識の普及にたいして（多くの場合、口に出しては言わぬ）熱情をもち、また、公衆が知るべきだと彼らの信ずるところをいつの日にか機会を得て公衆に告げたいという希望を抱いて新聞社の現場をやり抜いてゆく決意をした人々”でなければならない』

ＢＢＣから学ぶもの

最後にもう一つ。2003年のイラク戦争のときに、イギリスのＢＢＣは戦争前、重要な決定をしました。ＢＢＣは自国の軍隊のことを【わが軍とは呼ばない】、【イギリス軍と呼ぶ】という決定をしました。「なぜか？」「戦争とは

会場風景

どこの国の軍隊といえども、戦場では犯罪も起こすことを経験上知り尽くしていた。イギリス軍だけが起こさないはずがない。だから【わが軍】と呼ぶことで客観的報道を歪めてはならない」という判断でした。このＢＢＣの見識はすばらしいと思いました。ＢＢＣのジャーナリズム精神の素晴らしさ、歴史認識の深さには大きく学ぶものがあります。ご清聴、ありがとうございました。（会場　拍手）

対　談　永田浩三さん×根本　仁さん

永田　質問が多いので、質問の時間を余分に取って、20分ぐらい対談をやらしていただこうと思います。

入社の頃、受信料不払いの嵐

今日、根本さんと私とでＮＨＫの現状、過去どういうことがあったのか、お話しましたが、根本さんと私とは、6年違うんですね。私がＮＨＫに入ったのは1977年です。その前年に小野吉郎会長が田中角栄邸をＮＨＫの公用車で訪問して、待ち構えていた新聞記者たちに取り囲まれて「いったい何してんだＮＨＫ、公共放送のトップが刑事被告人の田中角栄の家にご機嫌伺いに行くとは何ごとか」ということで、受信料不払いの嵐が燃え盛るわけです。その結果、生え抜きのＮＨＫ会長を出そう、という声が出た、これが最初なんです、署名が153万人集まるんですよね。

永田　それで結果的にＮＨＫの芸能のプロデューサーだった坂本朝一さんという人が、初めて生え抜きの会長として誕生した。その時に私が入社したんです。当時、私はＮＨＫ京都放送局に赴任して最初の仕事を始めたんですけれども、関西はＮＨＫに対しての不信感がものすごくて、中継現場でご飯食べていると、中継車の横でご飯食べていると、受信料でご飯食べてるとかって…、

（会場 笑）

永田　そう言って（笑）。飲み屋に行くと、ＮＨＫの人間だとわかろうものなら大体からまれて、泣いて帰ってくるみたいな（笑）、（会場　笑）

そんな感じが続きました。大体、悪酔いして帰ってくることが多かったです。新人でも組合員なので、「とにかくＮＨＫに対してどれほどみんなが怒っているか、外へ出ていって聞いてみなさい」と言われるんですね。それでこういう集会に行ってボコボコにされて帰ってくるわけですけども、それは実はものすごくよかったと思いますね。根本さんは６年先輩なので組合の地方のリーダーもされていますけど、私はまだ新人なので一番下っ端ですけど、組合運動を盛んにやったんですよ。それは面白かったですね。当時、上田哲さんが社会党の国会議員として出ていて、春闘の勝利は上田哲氏が議員に当選することで総括されるみたいな変な時代で。私は京都分会でしたけれども、「おかしい。上田さんが当選することと春闘の勝利関係ないんじゃない？」というんで檄文を出したりして、反組合活動とかって（笑）、（会場　笑）怒られました（笑）、まあ、そんな時代でしたね。

根本仁さん　永田浩三さん

永田　松尾武さんとのドラマ制作

ちょっと伺いたいのは、当時、根本さんが大阪放送局にいらっしゃったときドラマのディレクターで、上にいたのが、松尾武さんですけど、番組改変事件のときに放送総局長として、安倍さんのいうとおりに改変を指示した人です。根本さんはその人をよく知っているんですね（笑）。そのことを教えていただけませんか。

根本　松尾武さんは、私が大阪のドラマにいたときに直属の上司として東京からやってきました。ひょうひょうとした男で、僕は個人的には面白い人やなと思っていたんですが、少々口も軽いというようなところもありました。でも、それがとても愛敬という部分で、演出も含めて敬意を表して、僕は買っていました。

永田　松尾さんは（「ETV2001」の番組改変事件の時）、安倍晋三さんに呼びつけられて、「あれ変えろ、これ変えろ」といわれて、戻ってきて編集長だった私に、松尾さんと合意をしていたものを全部白紙に戻して、被害に遭った女性の証言映像をバッサリ切っていったのです。松尾武さんのおじいさんは、松尾伝蔵さんといって二・二六事件のときに岡田啓介という総理大臣の秘書官でした。岡田総理は助かるんですが、松尾伝蔵大佐は殺害されました。親戚に瀬島龍三という人や敗戦のときの書記官長だった迫水久常という人がいます。とても調子のいい総局長で、私も印象としては面白いおじさん」という感じですが、政治家にいたぶられたときに戦うということはできなかったと思います。

2005年1月12日、朝日新聞が番組改変事件を朝刊にドカーンとスクープ記事にしたのです。いちばんいけないことは、松尾さんがぺらぺらしゃべってしまって、安倍さんに「公平公正にやってくれ」と言われただけじゃなくて、「『おまえ勘ぐれ』言われました」と全部白状しているわけです。それだけじゃなく、中川昭一について（死にましたけども）「あの人はヤクザみたいなやつだった」ということもしゃべっているわけです。その朝日の記事のあと、われわれみんな事情聴取をされたのですが、「これ誰だろう、しゃべったの」と。これも松尾さん以外にないわけですよね、本人だったのですね、しゃべってたのは。

永田　事件は朝日とＮＨＫの対立に

ところが松尾さんは、最後まで「知らぬ、存ぜぬ」をいうだけじゃなくて、ＮＨＫのニュースを使って否定したんです。結果的に何があったのか、というと、安倍さんや中川さんは朝日にへそを曲げて、「自民党は朝日の政治部記者の取材は受けません」と、兵糧攻めにするんです。結果的に謝ったのは朝日の側です。ＮＨＫと安倍さん中川さんが口裏合わせをした。贈収賄事件と同じですよ。金を送ったほう、金もらったほうが口裏合わせをして、贈収賄はなかったことにする、それと同じで、両方が否定したんだけれども、事実は事実です。でも、朝日が負けたんです。福島で根本さんは原発問題でずっと活動されているんですけども、「番組改変」をスクープした本田記者のこともよくご存じですよね。

根本　スクープした本田記者のその後

本田記者は、そのあと福島の相馬支局に飛ばされて、われわれの「生業（なりわい）を返せ！福島原発訴訟」の裁判に非常に熱心に取材に来られました。この「生業（なりわい）裁判」は、4000人の原告がいますが、私も最初から原告になりました。事故から２年後の2013年の３月11日に福島地裁に提訴した。そしたらそこに本田記者が来ら

れて、原告や弁護士を取材されました。

今また、転勤になって、岩手か別なとこに行かれています。ただ、あの時、取材時に録音テープを回していいかどうか、と事前に断ることは当然、必要なわけです。事前了解取らずに回していて、表沙汰になった時に、新聞社側は了解を取っていなければ、書いた記事が「どこからなんだ、テープを回していたんだろ」と言われるのは非常に困りますよね、時々そういうことが起きますよね。

永田　生きているうちに事件の責任をとって

ちょっと補足しますけど、松尾さんの家は東京の郊外ですが、私は2年に一度、ピンポーン鳴らして、「番組改変について本当のことを話してください」と行くんです。

もちろん、インターホンの向こう側から、「今日は体調が悪いのでお引取りください」なんて言って10秒で終わってしまうのが続いています。今6月ですから、7月になれば私は、また松尾さんのところにピンポーンって行こうかと思っています。今度はカメラマン引き連れて「勝負にいこうかな」と思っておりますんで、今日ここで皆さんとお約束させていただこうと思います。（会場　拍手）

彼はニュースと番組の責任者だったわけです。私は何を言いたいかっていうと、私はドキュメンタリーのディレクターでしたので、いろんなご遺族のところにも行き、いろんな取材をしました。そのときに言うことは一つです。「どうか、本当のことを聞かせてください」ということです。そういうことを日常的に業務としてやっている人間が、自分が都合が悪くなると本当のことを言わないで墓場まで持っていくなんていうことは、許されざることだと思うんです。ましてや公の公共放送の仕事をしてきて、それでご飯を食べてきた人間が、自分の都合で黙ってしまうとか、ウソを言うとか、もちろん、本当のことを言うと非常に差し障りがありまして、いろんな仲間をたくさん失います。だけども、新しい仲間が増えますし、結果的に「伏魔殿ＮＨＫ」と縁が切れるっていうのは人生においてよかったっていう（会場　　笑）こともあるわけです。帳尻がどっかで合うんじゃないかなと思ってもいます。松尾さんは、見てもない番組の感想を言うのが上手でした（笑）。

放送総局長だから忙しいわけです、ＮＨＫの中でいい番組が放送されると、局内の賞とかが出たりするんで、「あれはよかったよ」とかで少しスタッフをねぎらうようなお金が出たりもするし、表彰状がついてきたりもするんですけれども、「松尾さん見てくれたんだ」なんて思うと、見てないけど感想を言うのが上手だった。（会場 笑）

まあ、そういう人なんだと思ってがっかりもした、それがＮＨＫの番組ニュースの責任者だったというのが現実です。（会場　　笑）だけど、あれだけのひどいことが起きたときの責任者としての責任は、生きているうちに果たしてもらいましょう、ということですね。（会場　拍手）

根本　仁さん

根本　関連したことなんですが、僕のドラマ部門で松尾さんの下に部長の次には統括プロデューサーがいて、その下にプロデューサーがいます。僕、まだ40代の半ばぐらいまでは睡眠時間3時間で済んだんです。夜1時ぐらいに酔っ払って帰ってきて、朝4時ぐらいに起きて、大体、朝3本ぐらい見るんです。毎日それを繰り返しましたから、相当、分量見ている。「根本くん。昨日のあれ見たかね」なんていう統括プロデューサーがいるんです。「見ましたよ」、「どうだったかね」、「いやあ何とか何とか」「そうかね」と。あの人、見てないじゃないと思うんですよね。さっき、松尾さんが見てもいないけど、「見たよ」と言ったように、やっぱり「この番組よかったよ」とか何か論評するときは絶対自分の目で見て言ってほしいですよね。僕はね、こうやって上のやつは部下を利用するのかなと思いました。（笑）。

永田　あと、根本さんがさっき大阪でラジオドキュメンタリーで夜間中学校のすばらしい番組を作られたディレクターの福田雅子さん。福田ガー子さんは、私の高校の先輩です。大阪府立住吉高校というとこですけども、とても優れた女性ディレクターですね。

ありがとうございました。

じゃあ質問をお受けしながら進めていきたいと思います。

質問と回答

（時間の都合上、すべての質問にお答えできませんでした）

プロデューサーとディレクターの意味、仕事の内容をお教えください。

永田　簡単に言えば、例えば『クローズアップ現代』という番組がありますね。その番組を作るディレクター集団の取りまとめがプロデューサーです。だから親分みたいなもんですね。だけども、プロデューサーはただ親分で偉そうに「ああしろこうしろ」と指示しているだけかというと、現場に行って一緒に取材もするので、同じ番組制作の仲間でもある、あまりふんぞり返ってる人はチームをまとめていくのは難しいですね。人事権と予算権をプロデューサーは握っている。ただ、本当に面白いのは現場に行って取材をするディレクターのほうだと思います。根本さんがやってらっしゃったディレクター、ドラマの世界で言えば、ディレクターは監督です。プロデューサーは、映画の表記で言えば製作に当たります。根本さん何か追加して…。

根本　ディレクターとプロデューサーの関係で申し上げますと、プロデューサーが大変な出来のいい人で、ディレクターが普通であれば、ディレクターがお伺いを立てたら、こうしたほうがいいんじゃないかとアドバイスもいろいろいただく。中には、ディレクターがすごくてプロデューサーがあんまりっていう場合もあるんですよね。そうすると、ディレクターのほうがどんどんプロデューサーを攻め上げる。「こっちのほうがいいんじゃないかな」、「いや、だめですよあんなの」とか何とか言って、ディレクターのほうがプロデューサーあおっちゃって、「しょうがないな」とか、そういうこともあります（笑）。

根本仁さん　永田浩三さん

永田先生へ、今回の板野人事はＮＨＫ会長への布石だという人もいますが、その可能性はありますか。

永田　ＮＨＫの人事予算の最高決定機関は、経営委員会なんです。経営委員は内閣が候補者を選んで、国会承認になります。したがって、そもそも安倍政権の意向が経営委員会には極めて色濃く反映されてしまうという制度上の弱さがあるんです。経営委員会で会長が決まるという仕組みなんです。じゃあ、「ＮＨＫ会長が決められるものは何なのか」っていうと、会長は理事やＮＨＫの人事については、誰にお伺い立てる必要も本来はないんです。絶大な権限です。ＮＨＫ会長を辞めさせるのも、さっき根本さんがおっしゃった150万の署名とかで外圧をかけることはできますが、自分が辞めると言わない限り辞めなくていいんです。本来ならば。それぐらい権限は強いんです。なぜなのか、どんな権力も言論報道機関のＮＨＫのトップを簡単に首をすげ替えることができないという形式的な自立性が保たれている制度になっている。実体はさっき申し上げたように、極めて脆弱なんです。今回、板野くんがＮＨＫ会長になれるかどうかは、ひとえに経営委員会の判断です。決まるのは来年の1月。だから、これから夏、秋にかけてどんどん絞られていくわけですけれども、上田会長は「こんなわけのわかんないところで板野を送り込まれているのはいいかげんにしてくれ」と思っていて、このあいだまで「続投」と本人も希望していたようですが、その気はもうないというふうには、また聞きしていますけれども、現実はどうかわかりません。でも、さすがに板野さんを選びたいという人はいないんじゃないでしょうか。副会長はあるかもしれませんね。

日放労が労働組合として戦わないのは政権からＮＨＫ幹部をとおして組合に圧力がかかっているのではないかと考えられますがどうでしょうか。

根本　日放労に政権側から圧力をかける？など、全く必要がない。自分自身の中で牙を抜いて、返上しちゃったんですよ。権力なんか何にも関係ない。勝手にタコつぼの中に入っているんです。タコつぼも二重三重にタコつぼに入っ

ている。今、「日放労という組合がありますよ」ということ言いたくなさそうなんです。そのぐらいもう労使一体となっています。「政治問題には踏み込まない」というんです。委員長がですよ。さっき言った当時の書記長でその後委員長になった奥田良胤という人物がバイブルになっているんじゃないかと、僕は思います。こんなものをバイブルにしたらだめですよ。「われわれの時代の日放労活動は誤りだった」というんです。「誤り、何をこのやろう」とは思います（笑）。それが今の日放労の中央執行委員長、以下、幹部の判断です。

一つ目は、アメリカのニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト等々がトランプ大統領に対して立ち向かっているように思いますが、アメリカの放送局、公共放送はあるのですか。二つ目は、イギリスの BBC 放送のように NHK を国民の手に取り戻すにはどのようにしたらいいですか。

永田　アメリカにも公共放送はあります、ＷＧＢＨ。大きくないんですけれども、もう少し業務を拡大していったほうがいいんじゃないかとはずっといわれていますね。アメリカは三大ネットワークがあり、ＣＮＮがあり、ＦＯＸテレビがあり、なんですけども、「9・11」の同時多発テロのあとアフガン空爆がありイラク戦争になっていく中で、「アメリカ愛国者法」というのができて、メディアも一丸となって戦争の旗振りをしていったわけですけれども、そういうことはいけなかったという反省がすごくありますね。今の排外主義的なトランプ大統領に対して、体を張っているのがＣＮＮや三大ネットワークですけれども、一方でＦＯＸテレビも全部トランプ礼賛というわけではなくて、厳しい意見も述べたりもする。だから、トランプはアメリカ全体の中のネットテレビのかなりの部分をもう手中に収めているという中で、おととし、ネットテレビで「公平公正宣言」を出したんですよ。これ、何なのかっていうと、「公平公正」はカッコつきで、「政権批判をしない」という話です。キャスターが同じ文面を読み上げたりするわけです。けれども、「これおかしいんじゃないか」という批判はありますね。今、せめぎ合っています。新聞も経営が悪いですし。トランプ政権が大統領としてフェイクニュースの発信源になっているわけですね。彼のフェイクがいったい、いくつなのか数えた人がいて、1 万 2000 でしたっけ、一日 1 個じゃ済まないですよ。一日１０何個じゃないかな。それが、検証されているということが日本よりはましとも言えます。

ＢＢＣはどうか

ＢＢＣで言えば公共放送としての矜持を持っている。かつてサッチャー政権下のフォークランド戦争のときにも、「わが軍と呼べ」と。それを拒否した。イラク戦争のときもアメリカとイギリスが、大量破壊兵器をサダム・フセインが隠し持っているというでたらめな根拠に基づいて先制攻撃をしてフセイン政権を倒したけれども、「これは間違いだった」と後に検証されるわけですね。ＢＢＣはちゃんと「それは違っていた」と後日伝えた。同調した日本の政府、いまだに「当時はしょうがなかった」といっていますね。当時、小泉政権でした。とてもひどいと思います。イラク戦争に踏み切るときのＢＢＣの会長はダイクという人ですけれども、ダイクは結局、会長を辞めなきゃいけないことになるんです。最後、ダイクが、辞めるにあたってＢＢＣの社屋の１階のところで、ハンドマイクで、「私は今日ＢＢＣの会長を辞めるけど、公共放送の誇りを失うな、君たちはこれからも誇り高く頑張ってやってくれ」と言って、去っていくわけです。かっこいいですよね（笑）。

永田　で、ダイクどうなったのかっていうと、ワールドカップのＦＩＦＡの汚職事件のイギリス側の、イングランドの追求の急先鋒ですよ。だからダイクは健在ですよ、ＢＢＣ会長を辞めたあとも。ＮＨＫの会長は、辞めたら横綱審議委員とかなったりして…　（会場　笑）

わけのわからない人生がその後待っているわけですけど、ダイクはＢＢＣ辞めても相変わらず「公共的価値、公正さ」を考えて人生を送ってますね。本当に偉いと私はうらやましいと思って見ております。

ニュースと違ってドキュメンタリーには骨のある番組が少なからずあると思っているが、ニュースほど政権による横槍が入らないのはなぜか。偏りのない情報を取る方法について永田さんとしてアイデア、気をつけている点はあるかどうかお聞きします。

永田　さっきのディレクターとプロデューサーとの関係があるんですけれども、何がえらいと言っても、取材してきた人間のほうが偉いんです。現場の真実をつかんでいる人間のほうが尊重されるのが、メディアの世界であるべきです。NHKは巨大な組織ではありますが、それぞれの番組のチームは町工場のようなものです。町工場で言えば、ちゃんとネジが切れるとか、カンナが削れるとか、そういう技術を持っている人、いいものが作れる人のほうが尊重される世界です。それは変わらないような気はするんです。「ニュースはなぜだめなのか」と、言えばきりがありませんが、一つは安倍政権が典型ですけども、ニュースの出どころそのものを記者をコントロールして、おかみの官製ニュースがあまりにも多すぎる、あるいは「広告代理店・電通」発信のイベントニュースみたいなことが世の中にあふれている。そんな中で記者のしっかりした取材が尊重されない。日々、今日はこれ、明日はこれと「スケジュールニュース」に翻弄される職に成り下がっている。ここに構造的に問題があると思います。しかしながら、大阪の森友問題にしても、現場に分け入って「本当のことは何なのか」を食らいついてやっていく記者たちも少なからずはいるんです。そういう人たちが今、首根っこを押さえられたり、取材したものも最後の蛇口が閉まっていて水が流れてこないっていう、人事上のいじめとか制度上の苦しさがあって、ニュースの記者たちもとても苦労していると思います。

昔、朝日新聞の本多勝一記者の「NHK受信料拒否の思想」を読み、その中で本多氏が厳しく批判していたのはNHKの海外特派員の特権的地位、外国の高官にすぐに面談、取材できる、や、在外大使館主催のぜいたくなレセプションに招待されていたりして、極めて優遇されていたことを告発されていたりして、そんな庇護されているところに受信料など払えるかと主張されていたのに共鳴して、いまだに受信料の不払いを続けています。そのためにNHK職員が、継続的に私宅に来て、受信契約を締結するように迫ってまいります。最近の受信料契約についての最高裁判決などが出て外堀を埋められつつありますが、受信料拒否を継続することは違法で訴えられるようになりますか。

永田　この「兵庫の会」ともすごく関係の深い「奈良の会」がございますよね、今、裁判をしています。私はその証言もしなきゃいけないことでもあり、その考えとそんなに違わないです。ただ、NHK職員だったときは、不払いの話をされるときは内心少し傷ついていたんです。それは公共放送は受信料制度によって支えられているもんですから、本来ならば払っていただくほうがいいなって心から思っておりました。でも今は、NHKに対しての怒りを表明する方法はほかにないわけですから、それしかないんじゃないかと思います。「製造物責任」てありますでしょ、妙なものを作ったら作り手の側の責任があって、払う側に責任があるのではないわけです。それで、公共放送の価値が毀損されているニュースを出している場合に、それを正すために、こんなニュースじゃあお金払えませんよと、意思表明することは正当なことだと思いますね。

男性A　受信料については、NHKはわが国唯一の公共放送ですから、国民として受信料を納めて育てていかないといけない。今日の先生のお話はどっちかというとマイナスイメージをおっしゃいましたけども、NHKの自然科学番組、ああいうサイエンス番組を私は録画したりして楽しんでおります。あれはすばらしいと思います。民放ではできないと思います。受信料で申し上げますと、大体80%ぐらいが納めて2割が納めてないということですが、私の例でいきます、ある人が社宅に訪ねてこられまして、「納めてくれ」と。「いや、私は神戸の自宅で払ってんだなぜだ、説明しなさい」っていったら来なくなりました。最近、両親が亡くなりまして、実家が鳥取でテレビ見ようと思いましたけども、それも受信料が要るということでした。今はもう全部解約してテレビ撤去しています。この2点についてはNHKは公共放送としてはいかがなものかと思いますんで、見解を伺いたいと思います。

永田　NHKがなくなってしまえばいいとか、民放になればいいっていう意見があるんです。民放がもっと元気であれば、それでいいかなって思ってた時期もあるんですよ。でも、民放も、まあ優れたニュース番組ありますよ、だけどもトータルで言えば随分ひどい。そんな中で、NHKも

壊れてしまったらどうなるんだろうっていう、むしろ心配のほうが今は大きいですね。あれだけ、市民、国民が受信料を払って育ててきたNHKを解体して、今はやりの民営化とかたたき売ってしまうことは、断じてやるべきではないと私は思っています。だから不埒（ふらち）な人間がたくさん牛耳っているNHKではありますが、でも、働いている人間のかなりの部分は、いい人たちなんですよ。まともです。この人たちがまともに仕事をできるように考えを改めてもらって、いい仕事を日常的に毎日やり続けてもらうことが、結果的には日本社会にとってプラスになるだろうと私は思いますね。だから比較論です、つまりNHKを解体してしまうほうがいいのかということにおいては、私は「それは違う」と思っている。だけど、日々のNHKのニュースにまた立ち戻るんですけど、NHKのニュースが果たしているよい部分といけない部分と天秤にかけたときに、今のNHKニュースはいけないことのほうが多いと思う。だからニュースはすぐにでもちゃんと改めてもらわないと、NHKの罪はとても重いことは確かだと思いますね。
（会場　拍手）

「NHKから国民を守る党」なる得体の知れない団体が、最近、選挙で勢力を広げつつあることを知りました。やっていることはどうもデタラメのようですが、国民のNHKに対する反発、批判をうまく利用しています。フェイクニュースが話題の昨今ですけれども、詐欺的なフェイク団体ではないか。NHKとメディアを考える会と何か関係あるのかと一般の人々に誤解を与えかねない危惧を感じます。

永田　統一地方選挙で当選した方たちが何人もいらっしゃいますね。リーダーは立花孝志というNHKの営業部門にいた人です。だまされてはいけないのは、NHKをよりよくしていくとかそんなこととは関係なくて、「日本大志党」とか「日本維新の会」とか、そういうのと同根の歴史修正主義と排外主義的なそういう色の濃い、とても、言葉はきついですけど、不埒（ふらち）な政党だと思いますね。だから、だまされてはいけない、ということに尽きますね。

会場風景

安倍総理はいまだかつて一度も日本外国人記者クラブに出席したことがないと聞いている、なぜなんだろうかっていうことです。民主国家でこのような国はあるのか。

永田　トランプが日本にやってきたときのメディアの正当な伝え方についても、日本のメディアは極めて脆弱で、イベントは伝えましたけども、外交的意味についてはほとんどノータッチ。しかも、参議院選挙が終わったあと通商交渉、特に農産物、牛肉の問題と自動車の問題を天秤にかけて密約を結んだことについても、伝えないまま参議院選挙に突入していくのは、極めておかしいことですね。この一点をめぐっても、日本の外交についてのニュースのいびつさがはっきりしていると思います。その旗振りをしているのがNHKですね。朝鮮半島の状況やロシアとの関係についても見誤ることを外国人記者クラブで当然、追求されるでしょう、出ていけば。そういう覚悟がないどころか、そういう場においては、メディアをコントロールできないわけですから、損得の問題として、彼は何の得にもないから出てこないということだと思います。

司会　ありがとうございます。根本さん、一言どうぞ。

根本　私の話の最後に申し上げたいことを言わしてください。3年前にベラルーシのノーベル賞作家『チェルノブイリの祈り』を書かれたスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチさんが、福島原発の現地まで来られまた。東京に帰って東京外語大で講演したんです。その時言った言葉です。「日本社会に抵抗の文化がない、これは私の国と同じです」と。抵抗の文化。これはNHKの問題、日放労の問題等々も含めて基本的なところだと思っています。僕の地域もそうなんですが、「力のある人間に盾突くんじゃねえ」、「長いものには巻かれろ」と、そういうことをずーっと小さいと

司会　野上あけみさん

きから言われるわけです。「あれだめこれだめ」、学校でもだめ尽くしで育っちゃうんですね。高校生ぐらいなると、もうそういうもんだって自ら牙がなくなっちゃうんですよ。大学生になって就職するとき、だってもう牙ないでしょ。（会場　笑）

だから上の言うことにはすぐに従う。忖度する。それが当たり前になっている。なるべくしてなっていると思う。同じアジア人で、アジアからアラスカを通ってアメリカ大陸に行ったネイティブ・アメリカンの方々の名言集がいっぱいあるんですけど、特にこの文章だけは、300 年後の日本人にこうなってほしいという言葉でもあります。「死ぬこと、死など大したことではない、苦痛も大したことではない、だが、憶病風に吹かれることは万死に値する罪であり、これ以上の恥辱はない」と。憶病風に吹かれることを戒めているんですね。これを育てるためには、小さいうちから思うことを言える、そういう子どもたちの育て方を日本人がしていかなければ、それも 50 年 100 年でもまだ届かないかもしれない。そういう方向性を、われわれ大人が意識して持ってかないといけないんじゃないか、これが最後の私の訴えです。　（拍手）

司会　ありがとうございました。質問用紙は全部で 22 通寄せられました。まだ話し足りないとは思いますけれども、会場の都合がありますので、ここで質問を終わりにさせていただきます。質問用紙はすべて先生にお渡しします。永田さん、根本さん、本日は遠方からおいでいただいて、貴重なお話ありがとうございました。（会場　拍手）

２０１９年７月２日

ＮＨＫ会長　上田　良一様
ＮＨＫ神戸放送局局長　伊藤綱太郎様

ＮＨＫとメディアを考える会（兵庫）
共同代表　貫名初子・長尾粛正

要請書
参議院選挙に関して公平・公正な報道を求めます

日夜、公共放送の業務に精励しておられることに感謝申し上げます。
さて、参議院選挙が７月４日から始まります。投票に関する判断材料はメディアしかありません。放送と新聞です。特に、テレビ報道は、その中で最も身近な情報源です。

投票の判断材料となるべき問題は、いま山積しています。それは安全保障問題であり、原発問題であり、生活問題です。とりわけ憲法改正、年金削減・消費税増税は最も関心の高い問題です。

また、放置されたままの「モリ・カケ」問題や見解が対立する諸問題も多数あります。　ＮＨＫは視聴者の受信料で運営されているメディアです。いささかも政権寄りの報道であってはなりません。しかし、いまＮＨＫニュースは「アベチャンネル」と呼ばれています。ＮＨＫに働く職員は、これを恥と思わねばなりません。安倍政権を忖度したニュースを報道することは、公共放送として最も恥ずべき行為です。

今回の参議院選挙は、安倍政権の「憲法９条改正」が浮上する選挙になるでしょう。
６月２０日、自民党の「日本会議国会議員懇談会」が運動方針を決めました。それによると、「衆参の憲法審査会審議を促進し、早期の国会発議を目指す」としています。
この「日本会議」とは何か、安倍首相・麻生副総理は「日本会議」の特別顧問です。どんな日本を作ろうとしているか、詳しく報道することが欠かせません。これらを抜きに、単に「憲法改正を公約」と放送するだけでは、視聴者に対する選挙への判断材料としての報道とはなりえません。むしろ冒涜です。その他の問題に対する報道も同じことが言えます。

今回の参議院選挙報道に関して、次のように要請します。

要請事項

一.　各党の政策・公約を、多角的な視点から論点を明らかにし、十分な時間をとって分かりやすく報道すること。
一.　公正・公平な報道に十分な配慮をすること。
一.　参議院選挙の党首討論番組を新設すること。

NHK 神戸放送局へ申入れ